アーサー・ウエイリー英訳源氏物語の諸問題・第三部・上

――薄雲・槿・乙女――

井上英明

わたくしはこれまで前後三回にわたり、『アーサー・ウエイリー英訳源氏物語の諸問題』と題する一連の論考を発表して来たが(注)、本稿は早稲田大学『比較文学年誌』第三号（昭和四十一年六月刊）　登載の旧稿を直接に承けて英訳本第三部に入り、そのうちの前半部、すなわち「薄雲」「槿」「乙女」の三巻に若干の検討をこころみるものである。

英訳本の第三部は、

I　A Wreath of Cloud(薄雲)
II　Asagao(槿)
III　The Maiden(乙女)
IV　Tamakatsura(玉鬘)
V　The First Song of the Year(初音)
VI　The Butterflies(胡蝶)
VII　The Glow-Worm(螢)
VIII　A Bed of Carnations(常夏)
IX　The Flares(篝火)
X　The Typhoon(野分)

と次第してつごう十巻を収め、全体をA Wreath of Cloud「薄雲」と総称している。本稿での対象を前三巻に限らざるをえなかったのは、もっぱら本誌掲載に許される分量的制限を余儀なくされているまでで他意あることではない。

以下、英訳のテキストはLondon George Allen & Unwins Ltd第三版一冊本、原文は訳者のもちいた『湖月抄』(本文引用は弘文社刊有川武彦校訂『増註源氏物語湖月抄』中巻。なお、引抄にあたり適宜に仮名を真字に改めるところあり）により、訳文検討の方法はおおむね旧稿にしたがいながら、さっそく本論に入ることにする。

I 適訳 Adequate But Not Literal Translations.

a 解説的 Explanatory―拡大化 expanded

原作に対して訳者の翻訳的自由をいかんなく発揮した部分で、「ウエイリー源氏」の全体の基調をなす。ここではいちじるしく原作を拡大化して原文を解説的に訳出した典型的な例をいくつか掲げてみる。

(1)この春よりおふす御ぐし、尼そぎの程にて、ゆらゆらとめでたく、つらつきまみのかをれるほどなど、いへばさらなり。

（薄雲P.158—9）

Since last spring her hair had been allowed to grow and it was now an inch or two long, falling in delicate waves about her ears like that of a little novice at a convent. Her skin too was of exquisite whiteness and purity, and she had the most delightful eyes. P. 366

着袴の儀式を間近に控えた明石姫君の翠髪・顔色・眸子の美を語った部分であるが、「尼そぎの程にてゆらゆらとめでたく」という原文の直喩的で擬態語を用いた音楽的表現のなだらかさが、英訳では一転して、「髪はいまでは優美なウェーブをつくって彼女の耳もとに一インチか二インチほど垂れさがり、そのさまは修道院の可愛いい見習いの尼僧のようだった」となり、また、「つらつきまみのかをれるほど……」という視覚的な対象の美を嗅覚的に再現する王朝頻出の語法は、「肌の方は肌の方でこれもまたぬけるように白く、清浄であって、かつこの上もなくほれぼれするような目であった」と訳され、いっそう明晰な印象を与える。

(2)ちひさき御調度どもも、うつくしげにととのへさせ給へり。

（薄雲P.160—1）

But when they were shown the apartments which had been set aside for the new arrival, with a tiny bed, screens-of-state, and everything which a little lady could require, all beautifully set out and arranged, they began to take heart. P. 367

明石姫君を源氏が二条院に迎えるために、その西面を特に美しくしつらわせたところである。原文の簡潔さにくらべて訳文は「この新し到来者（明石姫君）のために、部屋が小さな寝台や立派な障子、それにこの小さな貴婦人が必要とするいろいろなものでしつらえられていて、あらゆるものが美しく飾り立てられ、配置されていたのをみせられたとき、一行のものは（乳母・少将・あてやかなる人たちなど）気をとりなおすようになって来た」とされている。場面を拡大的に忖度し、明石姫君をめぐる周囲の動静にまでたち入っている。

(3)「……なににつけてかは、その心よせことなるさまを漏らしきこえんとのみ、のどかに思ひ侍りけるを、今なん哀にくちをしく」と、ほのかにのたまはするも、ほのぼのと聞ゆるに……

（薄雲P.173）

……and she had often meant to tell him how sensible she was of his kindness. And there was another matter of which she had meant for some time to speak……to the Emperor himself. She was sorry she had never……Here her voice became inaudible,……P. 373

臨終の藤壺が年来の源氏の厚意に感謝する条で、とり次ぎの女房を

介して伝えた彼女の生涯における源氏への最後の言葉である。それだけにまずこの一節は原作通りに会話体に訳してもらいたかった。が、それはさておき、右の一節は「院（桐壺）の御遺言にかなひて、うち（冷泉帝）の御後見つかまつり給ふこと、とし頃おもひしることおほかれど」ということばに続くものである。したがって、ここでの「その心よせ」とは、桐壺院の遺言に忠誠を尽くして冷泉帝を後見して来た源氏の「厚意」であって、「ことなる様」とはその厚意にたいする私（藤壺）の気持が「異常な状態」なのである。ところで英訳をみると、「院の御遺言にかなひて」から「おもひしり得ることおほかれど」までは、First she thanked him for carrying out so scrupulously the late Emperor's wishes with regard to he surveillance of his present Majesty. Much had happened in the last years for which she had cause to be grateful to him,　　P. 372～3で、やや簡略ながらほぼ説明がついている。さらにいま問題にしている「何につけしか云々」は、併記した英訳の……and he had often以下すなわち「彼女は源氏の親切が自分にはどんなによく判っていたかを一再ならず源氏に告げるつもりであった」にあたる。とすると、つぎの一節、「彼女がしばらく前から話しておきたかった……冷泉帝自身に……いま一つの問題、それをついぞ果さなかったのが悲しかった」と続くなかで、冷泉帝に話しておきたかった「いま一つの問題」another matter これは実は原作のこの文脈にはみあたらない一条であった。しかし、読者にはこの一条がとりもなおさず若き日の源氏との背倫による冷泉帝出生の秘密であることは先刻承知済みのものである。藤壺がその臨終に際し、わが子冷泉帝出生の秘密を帝自身に告白しえない深刻な罪障感は、すでに右の一文の少し前に作者自身が明瞭に述べている。すなわち「うへ（冷泉帝）の夢の中にも、かかることの心をしらせ給はぬを（藤壺は）さすがに心ぐるしう見奉らせ給ひて、これのみぞうしろめたくむすぼほれたることに、おぼしおかるべき心ちし給ひける」（同巻P171）で、英訳もThe young Emperor was of course still wholly ignorant of the secret of his birth. In not acquainting him with it she felt that she had failt that she had failed in the disc harge of an essential duty, and the one matter after her death in which she felt any interest was the repair of this omission. P. 372となっていて、まず原意の伝通に間然するところはない。しかし、彼女はこの罪障の苦悩を源氏に告げることすらなしえず、「うしろめたくむすぼれたること」としてついに胸中にとどめてしまうのである。そこで、源氏への臨終のことばは少なくとも冷泉帝の後見という彼の厚意にたいする彼女の「心よせことなる様」を十分に尽くすことができなかったということより以上のものではない。藤壺の人柄は、崩後に人々の愁嘆をうつす一節にきわめて感動的に描かれているが、この深慮と博愛と慈悲の国母として終った藤壺の女院に、作者は背徳と苦悩と罪障の深刻な内省的意識を執拗にからませて、ポジティブな「明石上物語」に対立する「紫上物語」という、いわば、『源氏物語』のネガティブな一大プロットを張りめぐらしているのである。訳者は原文にないこの一節を加えることによって、それが物語のこのネガティブなプロットをより鮮明にする結果をもつに至らしめたものといってよい。

(4)「（源氏の詞）はかばかしきかたののぞみはさるものにて、年の内にゆきかはる時時の花のもみぢ、空の気色につけても、心の行く

こともし侍りにしがな。春の林、秋のさかりを、とりどりに人あらそひ侍りける、そのころのげにと心よるばかり、あらはなる定めこそ侍らざンなれ。もろこしには、春の花のにしきにしくものなしといひはべンめり。やまとことのはには、秋のあはれをとりたてておもへる、いづれも時時んつけて見給ふるに、目うつりて、えこそ花とりの色をも音をもわきまへ侍らね。せばき垣根の内なりとも、そのをりをりの心見知るばかり、春の花の木をも植えわたし、秋の草も堀りうつして、いたずらなる野辺の虫をも棲ませて、人に御らんぜさせんと思ひ給ふるを、いづかたにか御心よせ侍るべからん」ときこえ給ふに、いと聞えにくきこととおぼせど、むげにたえて御いらへきこえ給はぜらんもうたてあれば、「(秋好の詞)ましていかが思ひわき侍らん。げにいつとなきなかに、あやしとききし夕べこそ、はかなう消え給ひにし露のよすがにも、思ひたまへられぬべけれ」と、しどけなげにのたまひ消つもいとうたげなるに、えしのび給はで、

(源氏歌)　きみもさは哀をかはせ人しれず
　　我身にしむる秋のふゆかぜ

忍びがたきをりをりも侍りしか」と聞え給ふに、いつこの御いらへかはあらん。

(薄雲P・187—9)

源氏と前斎宮梅壺の女御との間に交わされる有名な春秋優劣比較論である。この一節に相当する英訳全文を掲げるのはきわめて長文にわたるので、必要部分のみを摘記し、その生彩ある訳文を考察することにする。まず、原文の「年の内にゆきかはる時々の花もみぢ……心のゆくこと侍りしがな」あたりから問題となる。すなわち、I hope I shall have a little time left for things which I really enjoy—flowers, autumn leaves, the sky, all those day-to-day changes and wonders that a single year brings forth; that is what I look forward to.(少しばかり時間をおいてわたくしが実際に楽しんでいることがらについて論じてみたいのです。花々、秋の木の葉、空、日々に移り変わる一切のもの、一年のうちに生起する奇観、わたくしが楽しみにして期待するのはこれなのです)となる。「春の林、秋のさかりを」から「あらはなる定めこそ侍らざンなれ」までは、Forests of flowering trees in spring the open country in autumn…… which do you prefer? It is of course useless to argue on such a subject as often been done. It is a questions of temperament. Earch person is born with "his season" and bound to prefer it. No one, you may be sure, has ever yet succeeded in convincing anyone else on such a suubject.(春の花咲く木々の森、秋の広々とした平野の地方……あなたはどちらを好みますか？　こんな問題を論じることは、これまでにもしばしばあったことでして、むろん益のないことです。それは気質の問題ですね。人にはそれぞれ、生まれた「季節」があり、その季節を人は必然的に好むのです。　ご承知の通り、こんな問題を他人に納得させることのできた人は、いまになおたえてありませんでした)と、ずいぶんくわしくなり、「もろこしには」から「いづかたに御心よせ侍るでからん」までの源氏のセリフは、ほぼ原文に忠実にたどられ、しかもきわめてヴィヴィドな訳出ぶりである。そして源氏の問いにたいする梅壺の態度「いと聞えにくきこととおぼせど、

むげにたえて御いらへきこえ給はざらんもうたてあれば」という表現は、but politeness demanded some sort of reply and she said timidly:（なにか返事をするのが礼儀なので彼女はおそるおそる口を切った）と簡潔に訳して、「ましていかが思ひわき侍らん」は、「源氏の君にもようおできにならないことが、ましてわたくしふぜいのものにどうして春秋優劣の見分けができましょう」ということなのだが、英訳は、But you have just said you can never yourself remember when it was you saw or heard the thing that pleased you most. How can you expect me to have a better memory?（でも、一等お気に召した物をご覧遊ばすか、お聞き遊ばすかしたのは（春秋）いつのことであったのか、御自身けっして想い出すことがおできにならないと、おっしゃったばかりではございませぬか。わたくしに（春秋のいずれかに）あなたよりいっそうよい想い出があるだろうなど、どうしてお思いになれまして？）と、やゝ角度の変わった訳である。つぎに、「げにいつとはなきなかに、あやしきときき し夕べこそ」は、『古今集』五四六番読人不知の古歌の下句をたくみに織り込んで原文通りに訳してあるが、「はかなう消え給ひし露のよすがにも、思ひたまへられぬべけれ」からまた調子が変わる。原文の意味は「（古歌に聞いた）秋の夕暮れが、むなしくお亡くなりになってしまわれた露（母御息所）の縁としてしぜん思わずにはいられないのです」である。母の亡くなった秋の夕暮れを好む理由を、「露のよすが」とした和朝特有の縁語的表現の十全な英訳は至難であろう。訳文はつぎのような穏微な表現となる。…Perhaps I am more easily moved at such moments(the dusk of an autumn evening)because, you know, it was at just a such time……'とな

って秋の夕べが母の死の時であったことを直接に訳してはいない。しかし、訳者が完全に原文を理解していることは、これ以下の文と歌とをつぎのように訳していることから十分察知できる。‥knowing well indeed what was in her mind Genji answered tenderly with the verse The world knows it not, but to you, at Autumn, I confess it: your wind at night-fall stabs deep into my heart! P. 380－1（彼女の胸のうちがいかなるものであったか、実によくわかったので、源氏は彼女に歌でやさしく答えた。世間はいさ知らず、おお秋よ、あなたにわたくしは告げる。黄昏時のあなたの（秋の）風はわたくしの胸を深く突きさすのです）と訳して生彩あるものとなっている。歌の解釈に小異があるが、この訳文は十分に原意を伝えて妙である。

(5)「（源氏の詞）……かくさぶらひたるついでを過し侍らんは、こころざしなきやうなるを、あなたの御とぶらひきこゆべかりけり」とて、やがて簀の子よりわたり給ふ。（槿P・199－200）

I naturally intend to pay my respects to your niece today, indeed, I should not like her to regard my visit as a mere afterthought, and for that reason I shall, with your permission, approach her apartments by way of the garden instead of going along the corridor and through the hall! P. 386

花散里などの場合もそうであったが、源氏にとってテキは朝顔その人であって叔母の女五宮などではなかった。右は源氏の君が心中朝顔の「御有さま、かたたちも、いとゆかしく、哀にて、こそ念じ給はで」女

五の宮に切り出すセリフである。源氏にとって女五の宮などすでに眼中にない。英訳はその辺をかなりはっきりとうち出す。「当然のことながらわたしくの意図はあなたの姪御さんに敬意を表しに行くことにあるのです、と訳して、その理由とその後の行動をこれもまた明確に解説する。「わたくしの訪れを彼女にたんなる後思案としてみられたくはないのですよ。ですから、もしよろしかったら、わたくしは廊下づたいに広間をぬけていくかわりに庭を通って彼女の部屋に近づくのです」。

(6)いびきとか聞きしらぬ音すれば、よろこびながらたち出でたまはんとするに、またいと古めかしき咳きうちして、参りたる人あり。

(槿P・210-1)

源氏が朝顔ゆえに桃園宮を再訪問したさい、かって戯れた源典侍に邂逅する場面である。一刻もはやく朝顔に逢いたいため喜々として女五の宮の許を出ようとする一瞬、きこえて来たのが場ちがいの老いのしわぶき、英訳はすこぶる長大な解説をほどこす。

Then suddenly he heard a loud and peculiar noise. Where did it come from? What could it be? His eye fell upon the Princess. Yes; it was from her that these strange pounds proceeded for she was now fast asleep and snoring with resonance such as he would never have conceived to be po-ssible. Delighted at thir opportunity of escape he was just about to slip out of the room when he heard a loud 'Ahem,' also uttered in a very aged and husky voice, and per-ceived that someone had just entered the room. P. 391

実は右に引いた原文は女五の宮のセリフ『宵惑ひをし侍れば、物もえ聞えやらず』とのたまふほどもなく」を承けるものであった。したがって源氏は宵の口から居眠りをしている女五の宮を前にしている。英訳が右のようになるのはきわめて自然である。「その時とつぜん源氏は声音い妙な物音をきいた。何処からきこえて来たのか。一体何だろう。彼の目は女五の宮に注がれた。なるほど、この不思議な物音は彼女より発したものであった。彼女はいまやぐっすり眠りこみ、彼がとても思いも及ばないような音をたてていびきをかいていたからである。逃げ出す好機到来にうれしくなって、部屋をすべり出そうとしたちょうどその時だった、彼は非常に年をとったしわがれ声で声音く『えへん!』という音もしたのを聞いた。そして誰かが部屋に入って来ていたのに気がついた」となるわけである。原文のみじかい、何でもない一節を起点として、訳者の縦横の筆が駆けめぐり、源氏の動静をじつにいきいきと、かついくぶんコミックに描き出すことに成功している。

(7)ありつる老らくの心げさうも、よからぬものの世のたとひとか聞きしと、おぼしいでられてをかしくなん。

(槿P・213)

'And old woman in love and the moon at midwinter:' he remembered the saying that those are two most dismal thing in the world; but tonight he felt thin collocation to be very unjust……'P. 392

朝顔の君の冷淡さをもてあました源氏が先刻の源典侍の懸想を追想する場面である。「月さし出でて薄らかに積れる雪の光にあひて、なかなかいと面白き夜のさまなり」というのが外景の説明である。引

用した条はこの文に連続している。したがって原文の大意は「さきほどの老女（源典侍）の色めかしい懸想も『世間ではよからぬものの諺とか聞いた』と、想い出されておもしろい」となるのであるが、英訳は前文にあった外況の説明をも包摂したきわめて周到な解説となっている。すなわち「ありつる老らくの心げさう……世のたとひとか」では、『河海抄』の引く現存本『枕草子』にはない「すさまじきもの、おうなのけさう、しはすの月夜」をうちつけに本文の中に介入させ、「おうなのけさう、しはすの月夜」を「よからぬもの」dismal「たとひ」sayingとし、かつこの二句の並列 collocation にたいする「をかし」という源氏の感想をきわめてダイレクトに「すさまじ」very unjustとしたのである。原文において源氏の心理がかもす余韻は伝わらないかと思うが、それだけにより直截で正確な構文に変わって読者に明瞭な理解を促すものと思われる。

(8)（源氏の詞）「時時につけても、人の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも、冬の夜の、すめる月に雪の光あひたる空こそ、あやしう色なきもの、身にしみて、此世の外のことまで思ひ流され、おもしろさも哀さも残らぬ折なれ……」　（槿P．219）

'We decided the other day,' said Genji to Murasaki, 'that Lady Akikonomu's season is autumn, and yours spring. This evening I am more sure than ever that mine is winter. What could be more lovely than a winter night such as this, when the moon shines out of a cloudless sky upon the glittering, fresh-fallen snow? Beauty without colour seems somehow to belong to another world. At any rate, I find such a scene as this infinitely more l vely and moving than any other in the whole year. P. 395

二条院の白雪の庭に皎々たる月光が映え、冬空の凄絶な美しさに源氏が感動する条である。原文と英訳を比照すると、ここでもまた後者の方がより具体的に、しかも巧妙な注釈が加わってすこぶる生彩あるセリフに訳されている。殊に注目されるのは「人の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも、冬の夜の云々」の前半部であろう。英訳は『わたくしどもはいつぞや決めましたね』、源氏は紫上に言った、『秋好中宮の季節は秋、そなたのは春であるとね。今宵、わたくしの季節は断然冬だと確信しましたよ。月の光が雲のない空から、きらきら光る降りたての雪に輝く今夜のような美しい夜にまさるものがありましょうか？……』となるのである。英訳は「薄雲」の巻での春秋の争いの場面をここで再び喚起し、そのイメージを強固に持続させるわけである。プルーストの大作に比較されるのもゆえなきことではない。

(9)（槿歌）「ふぢ衣きしは昨日と思ふまに
はかなく」とばかりあるを、れいの御目とどめ給ひて見おはす。
けふはみそぎの世にかはる世を
（乙女P．228—9）

It seems but yesterday that I first more my sombre dress; but now the pool of days has grown into a flood wherein I soon shall wash my grief away.'5 The Poem was sent without explanation or comment and constituted, indeed, a meagre reply; but, as usual, he(Genji)found himself constantly

holdiog it in front of him and gazing at it as though it had been much more than a few poor lines of verse.

5 Her period of mourning is almost over. There is a play of words; fuji= Wirtaria, and fuchi=pool. P. 399

歌の訳は注5の解説と相俟ってほぼ原意を忠実に伝えるが、問題は「とばかりあると、れいの御目とどめ給ひて見おはす」である。この簡潔な叙述が英訳では、「歌はなんの説明も注釈もなく送られて来て、まことに味も素っ気もない返事になった。しかし、源氏は終始その手紙を自分の前に置いてじっと見つめていた。まるでその手紙が貧弱な数行の詩以上の、はるかに重要な意味をもつものであるかのように。」となる。こう訳されると、早くから源氏の恋の対象であり、かつ彼の恋人たちのなかでは異例の冷淡さをもって知られた槿の姫君の性格がいっそう浮き彫りにされ、そのことが逆に源氏の胸の火をいやがうえにも燃えたたせることになるのであろう。以上は拡大解釈の例である。

——縮約化 contracted

さて、つぎは原意を縮約してその要旨を伝えるのにとどめたものや、おおむね原意を辿りつつ、一方ではすっかり調子を変えてしまって、結果的には原作の縮訳となった例を引く。これもまたこの英訳の特徴の一つに数えられるものである。

(1)この頃は猶もとのごとく参りぎぶらはるべきよし、大臣もすすめのたまへば、「今は夜居などいと堪へがたえおぼう侍れど、おほせごとのかしこきにより、ふるき御心ざしをそへて」とてさぶらふに、……（薄雲P・175）

Un urgent message, conveyed by Prince Genji, now reached him (a priest of Lady Fujitsubo). The night was already far advan-ced, and the old man at first protested that these nocturnal errands were no longer within his capacity. But in the end he promised, out of respect for His Majesty, to make a gre-at effort to appear,……P. 374

夜居の僧が冷泉帝出生の秘密を密奏する直前の一節である。「今は夜居など……御心ざしをそへて」は老僧じしんのセリフであることはまちがいない。しかるに英訳はこれを地の文に転換しているが、その功罪は別として、このセリフ中の「おほせごとのかしこきにより」は源氏の君の仰言であり、かつ「ふるき御心ざし」は老僧に対する藤壺入道宮の厚志にほかならない。訳者はこれをたんにout of respect for His Majestv と片付けて、入道宮の恩頼に及んでいない。

(2)雪のいたう降りつもりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけじめをかしう見ゆる夕ぐれに、人の御かたちも光まさって見ゆ。（槿P・2—819）

By this time the snow was lying very deep, and it was still falling, though now very lightly. So far from obliterating the shapes of pine-tree and banboo, the heavy covering of snow

seemed only to accentuate their varying forms, which stood out with strange distinctness in the evening light. P. 395

右の一節はIA「拡大化」中の文例(8)の前に位置する。内容は二条院の美事な雪景色であるが、その景色の訳は原文以上に委曲を尽くしている。しかし、末尾の「人の御かたちも光まさりて見ゆ」は、源氏の容姿が皚々たる白雪に美しく輝やく様であるが、これに相当する訳がついに見当らない。Shining Prince—光源氏というヒーローの古物語的形容はその生誕を叙した首巻「桐壺」のみでよいと判断されたのであろうが。ちなみにウェイリーは「桐壺」という題名の脚注でこの巻が依然としてその「伝統的な伝奇物語」the conventional fairy-tableの影響下にあることを指摘している。（英訳P・7参看）

(3)御かはらけまゐり給ふに、暗らうなれば、大殿油参り、御湯づく、くだ物などたれもたれもきこしめす　（乙女P・251）

He passed round the wine-flagon, and as it was now getting dark, the great lamp was brought in, soon followed by supper. When the meal was over, ……P. 411

槿の君の母大宮邸での饗宴の場面である。「大殿油参り」以下は、「灯をともし、お湯づくや果物など（大宮をはじめ内大臣〈頭中将〉も夕霧も雲井雁も）だれもかれもが召し上る」という意味で、盛大な饗宴の図が連想されるが、英訳は「大きなランプが持ち込まれるとすぐに晩餐となった。食事が終った時…」となっていて、いとも簡単な叙述である。

(4)（大宮の詞）「かたはらさけ奉らず、明暮のもてあそび物に思ひ聞えつるを、さうざうしくもあるべきかな。残すくなきよはひの程にて、（雲井雁の）御有様を見はつまじきことと、命をこそ思いつれ。今さら見捨ててうつろひ給ふやいづちならんと思へば、いとこそ哀れなれ」とて泣き給ふ。姫君は恥づかしきことをおぼせば顔ももたげたまはで、ただ泣きにのみ泣き給ふ。（乙女P・265 5 1）

She (Kumoi no Kari) felt very unconfortable while Princess Omiya told her how lonely she would be without anyone to play with, and how(though the houses were not far apart) it would seem as though she had gone to live a long long, way off. All this trouble, the child felt dimly, as she listened to the recital of Omiya's woe, came from having made friends with that little boy, and hanging her head, she began to weep bitterly. ……P. 419

雲井雁を手許から離したくない大宮が別離の恨みごとを当人に切々と繰り返す条である。原作と英訳とを対照すると、まず会話体の大宮のセリフが一変して雲井雁の視点からみた叙述体となっている。しかしそれはたんに直接話法から間接話法へ、といった初等文法のごときものではない。すなわち、「かたはらさけ奉らず」から「さうざうしくもあるべきかな」までは、「遊び相手もなくていることはなんと淋しいことであろう。また、雲井雁にはまるで遠い遠いところにはなれてしまって住むかのようになんとまあ、思われるのであろう（二人の家は

そう遠くは離れてはいないのに）と、大宮が自分に語っている間、雲井雁はひどく不快に思った」と必要以上にくわしく訳され、そのかわり「残すくなき」以下の大宮のセリフは省略に付されている。All this troubles以下は、その後の「姫君は恥づかしきことをおぼせば、かほももたげ給はで、ただ泣きにのみ泣き給ふ」と続く中で、「恥づかしきこと」を夕霧との事件であると解説し、おなじく雲井雁側からの心理（the child felt dimly）として、ほぼ原意に忠実な訳にすぎない。これは次項Ⅰのbに入れてしかるべき例かもしれぬが、英訳に省略された原作の部分をthe recital of Omiya's woeとしていることなどから、やはり縮約化の一例と判断するゆえんである。

(5) 男はさも騒がればと、ひたぶるにゆるし聞え給はず。（乙女P・267）

She(Kumoi no Kari)attempted indeed to rush from the room; but Yugiri held her fast. ……P. 419

乳母の宰相の君のはからいでやっと実現した夕霧と雲井雁との構曳、それも束の間のことであった。雲井雁の父で、二人の恋の反対者内大臣（頭中将）が、御前駆の声いたけだかに帰邸するのを聞いて家中騒然、夕霧は「そんなに騒がれるのなら、いっそのこと騒がれてやれ」と肚をきめて、雲井雁を離さない。英訳は居直って度胸をすえた夕霧の心理を黙殺して「部屋から急いで逃げ出そうとする雲井雁を夕霧はしっかりとつかまえた」とだけにしたのは遺憾である。

Ⅰb 心理分析的　Psychoanalytical

作中人物の感情の内面を深く堀りさげて分析的に記述した例で、原析の文体とはある意味で対極的な位置を示すものである。

(1) （源氏は）此雪すこしとけて（大井に）わたり来給へり。（明石上は）れいは、まちきこゆるに、さならむと思ふことにより、胸うちつぶれて、ひとやらならずおぼゆ。我心にこそあらめ、否び聞えんをしひてやは、あぢき、など異などとおぼゆれど、かろがろしきやうなりと、せめて思ひかへす。（姫君は）いそ美しげにて、前にゐ給へるを見給ふに、おろかには思ひ難かりける人の宿世かなと思ほす。（薄雲P・158）

The snow was now falling a little less fast. Suddenly Genji appeared at the door. The moments during which she waited to receive him put her always into a state of painful agitation. Today guessing as she did the purpose of his visit, his arrival threw her immediately into an agonizing conflit. Why had she consented? There was still time. If she refused to part with the child, would he snatch it from her? No, indeed; that was unthinkable. But stay! She had consented; and should she now change her mind, she would lose his confidence for ever. At one moment she was ready to obey; a moment afterwards, she had decided to resist by every means in her power.

She sat by the window, holding the little girl in her arms. He thought the child very beautiful, and felt at once that her birth was one of the most important things that had happened in his life. ……P. 365-6

源氏の大井来訪の時は、とりもなおさず明石上にとって親子別離の瞬間であった。「此雪すこしとけてわたりたまへり」という一見して平凡な書き出して始まるこの一節を、併記した英文のごとく、ウエイリーはすこぶる長大な訳文をもって明石上の心理に深くたち入る。――「雪はすでにやや小降りになっていた。突如として玄関に現われたのは源氏だった。源氏を迎えようとして待つ刻々の時間はつねに痛ましい心の動揺を明石上におこさせた。今日あたり、源氏がやって来るのではないかと予期はしていたものの、源氏の到来によってたちどころに彼女の心は苦悶のため千々に乱れた。なぜ承諾したのであろう？ まだ時間があったのに。彼女が子供と別れるのを拒んだら、源氏は子供を自分からひったくって奪い去るであろうか？ いいえ、そんなことはいかにも考えられぬことだ。だが待てよ！彼女はすでに承諾している！今となって心変りでもしようものなら、源氏の信頼を永久に失なってしまうことになりかねない。一瞬彼女はやはり従おうとした。だが次の瞬間できるかぎりどうしても抵抗しようと心に決めていた。彼女は可愛い女の子を腕に抱いて窓のそばに座った。非常に美しい子だと源氏は思った。そして、この子が生まれたことは自分の生涯におこった最も重大なることの一つなど、源氏はとつぜん感じた」。以上が右の原作に相当する英訳の大意である。明石の上のagonizing conflitと終尾の源氏の感懐、いきいきとして原作をしのぐ。

(2)常よりも黒き御よそひにやつし給へる御かたち、違うところなし。うへも年頃鏡にも思しよることなれど、聞し召ししことののちは、又こまやかに見奉り給ひつつ、まことにいとどあはれに思しめさるれば、いかでこのことをかすめ聞えばやと思せど、さすがにはしたなく思しぬべきことなれば、若き御心地につつましく、ふともえうちいで聞え給はぬほどは、ただ大方のことどもを、つねよりことになつかしう聞えさせ給ひ、うちかしこまり給へるさまにて、いと御気色ことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見奉りたまへど、いとかくさださだと聞し召したらんとは思さざりけり。

（薄雲P・180S1）

For years past it had struck the Emperor, on looking at himself in the mirror, that he was extraordinarily like Prince Genji. Since the revelation of his true parentage, he had more frequently than ever examind his own features! Why, of course! There was no mistaking such a likeness! But if he was Genji's son, Genji too must be aware of the fact, and it was absurd that the relationship should not be acknowledged between them. Again and again he tried to find some way of introducing the subject. But to Genji, he supposed, the whole matter must be a very painful one. He often felt that it was impossible to refer to such a thing at all, and conversation ofter conversation went by without any but the most general topics being discussed, though it was noticeable that Ryozen's manner was even more friendly and

charming than usual. Genji who was extremely sensitive to such changes did not fail to notice that there was something new in the young Emperor's attitude towards him—an air of added respect, almost of deference. But it never occured to him that Ryozen could by any possibility be in possession of the whole terrible secret.……P. 377

冷泉帝が自分の出生の真相を告げられて懊悩し、源氏も帝がそのことをすでに察知しているかどうか、疑心暗鬼の状態でいる場面だが、英訳はあえて長文を付記したように、微に入り細を穿っている。もっとも、密奏される直前の帝の心理、密奏する瞬間の夜居の僧の心理、事態明白となったときの帝の驚愕、いずれも右の文に至るまでの道行きと人物の心理の流れは過剰に分析的な訳となっているが、この箇所あたりがそのクライマックスである。問題となるべきところは「聞し召ししことののちは」以下であろう。原作の意味は「(夜居の僧の物語を)帝がおききになってからはいちだんと源氏の御顔を注意深くお見上げし、一そうなつかしく思われるので、どうにかしてこのこと(源氏が自分の実父であること)を源氏にものめかしてみたいとお思いになるが、ほのめかせばかえって源氏もきまり悪くお思いになられそうなことなので、まだ若い帝のお心から、出しぬけにもよう源氏に打ちあけることの出来ないうちは、ただ世間一般の事などを平素よりはしみじみと源氏にお話しになった」ということで、帝の心理や行動にさしたる細叙はみあたらない。英訳は「又こまやかに見奉り給ひつ」を「帝が自分自身の顔つきを覗く」として文脈を誤解したが、その後は「そりゃ、当然のことではないか！そのように源氏に似ているのは覆うべくもなかった！だが、彼がもし源氏の子なら、源氏もまたその事実に気づいているにちがいない。二人の間で親子の関係が認知されていないなんて馬鹿げたことだ。帝は再三再四なにかの方法をみつけだしその話題をもちだそうと試みた。けれども、源氏の方でもこの問題はそっくりそのままたいへん痛ましいものであるにちがいないと、帝には思われた。そんなことに言い及ぶのはとても不可能なことだと思われた。いろんな会話が二人の間に続けられたが、それはもっとも一般的な話題ばかりが論ぜられるだけであった。冷泉帝の所作がいっもより一そう親密でうっとりするものであることがどんなにきわだったものであったとしても。」と続けられている。またこうした冷泉帝の態度にたいする源氏の反応は後文にあるように大体原意に忠実であるが、原作にみられる朧化的、暗喩的な言い廻しが、英文になるといかにも直截的となるのは他の訳例とともに当然のことである。

「心理分析的」な訳例は他にいくつも散見するが、なにぶんともその解説に多くの紙幅を要するので、右の二例にとどめて他は補遺をみていただきたい。

II 不適訳 Inappropriate Translations

a 解訳 Due to misinterpretation of word meaning and usage

言葉の主味、用法の解釈で、あきらかに不適訳と判断せざるをえない例。

(1)しろき衣どものなよよかなるあまた着て、ながめたる容体、頭つき、うしろでなど、かぎりなき人ときこゆとも、かうこそおはすらめとみゆ。（薄雲P.157）

She (Akashinoue) was clad in many wraps of some soft, white, fluttering stuff, and as she stood gazing before her with hand clasped behind her head, those within the room thought that, prince's daughter though her rival was, she could scarce be more lovely in poise and gesture than their lady in her snowy dress.……P. 365

「ながめたる容体、頭つき、うしろでなど」を英訳は「明石上はもろ手を後頭にかさねて眼前をみつめて立っていた」としている。「うしろで」とは「後手」ではなく、「後方」のことで、「後之方（ウシロッヘ）」の約かともいい、意味は背面、後姿である（『大言海』）。以上のごとく、これは訳者の誤解であるが、「かぎりなき人ときこゆとも」をPrince's daughter though her rival was……（彼女に匹敵する女性はもちろん王統の姫君であるといっても」としたのは原意を具体的に明示してよいと思う。

(2)そのころおほきおとどうせ給ひぬ。世のおもしとおはしつる人なれば、おほやけにもおぼしなげく。しばしこもり給へりしほどをだに、あめのしたのさわぎなりしかば、まして悲しと思ふ人おほかり。（薄雲P.168）

About this time Lady Aoi's father died. His name had carried great weight in the country and his death was a heavy loss to the present government. It so happened that the period during which he took part in public life had been marked by much dirorder and unrest. A renewal of these upheavals was now expected and general depression prevailed. P. 371

原作の圏点を施した部分は、「冷泉帝におかれても思い嘆かれる。左大臣を辞してちょっとの間、籠居なされている時でさえ」の意である。英訳はこの部分を「現政府にとって重大な損失であった。たまたま公生活に参与した期間は」となっている。前半はともかく、後半は意味がまるで反対である。

(3)はかばかしからぬ身ながらも、むかしより御後見つかうまつるべきことを、心のいたるかぎりは、おろかならず思ひ給ふるに、（薄雲P.172—3）

In spite of the difficulties into which I myself have sometimes fallen, I have tried to do my best for His Majesty, P. 373

「はかばかしからぬ身ながらも」とは「私、すなわち源氏はつまらぬ身ではありますが」という謙退の表現である。英訳は「わたくし自身しばしば窮境に陥ったにもかかわらず」となっている。あきらかに原意を裏切った訳だが、後文は正確な訳であるから、あるいはこうした謙退の表現は欧米人には理会されがたいことを慮ってのことであろうか。

(4)よづかぬ御有様は、とし年にそへても、物ふかくのみひきいり給ひて、えきこえたまはぬを、見奉りなやめり。「すきずきしきやうになりぬるを」など、あさはかならずうち歎きて立ち給ふに、

（槿P.203）

She had for years past been watching her mistress become more and more aloof from the common interests and distractions of life, and it had long distressed her to see Prince Genji's letters so often left unanswered. 'I did ill to call at so late an hour,' he said; 'I can see that the purpose of my visit has been wholly misunderstood. And sighing heavily he turned to go. ……P. 386-7

「世づかぬ有様」とはここでは「男女間のことにうとい」ことを指すのであつて、英訳のように「共通の利害や人生の気晴らし」の意ではない。また、「すきずきしきやうになりぬるを」は、「今日の訪れは好色めいた状態になりましたな」という意味で、槿の君が「男女間のことにうとい」という上文に呼応するものである。「『こんなに遅い時刻に訪ねて悪いですね』、源氏はいった、『わたくしの訪問の目的がすっかり誤解されていたことが分りましたよ』」という英訳は、右の呼応関係を無視した単なる源氏の弁解にとどまるといつてよいだろう。

(5)猶ざえをもととしてこそ、大和魂の世にもちひらるるかたもつよう待らめ。

（乙女P.234）

For the truth is, that without a solid foundation of look-learning this "Japanese spirit" of which one hears so much is not of any great use in the world. ……P. 402

「ざえ」は学才・漢学の才の意であるから book-learning でもよい。しかしこの一文は、短節ながら高名な中国文学者を父にもった紫式部の、学問観を源氏に託して言いきつたものだけに、book-learning と Japanese spirit にいま少しの解説がほしいところである。「大和魂」Japanese spirit は中国の学問—「ざえ」book-learning にたいする日本の実際的な才幹を意味し、ここは『菅家遺誡』に見える「和魂漢才」の精神を継承するもので、岡一男博士は「中国伝来の学問を活用することの重要性をといている。才は唐土から伝来の正式の学問であり、大和魂は、いわばわが民族固有の敢為実践の気性で、だれしも多少持つているが、漢学の才にささえられると、そうでないとでは経世上まったく違う。そこに大学教育が必要であるゆえんがあるというのである」と説かれている（『評釈源氏物語』）。この文の少し前に「文才まねぶも」P.233というのがあるが、これもたんに writings and books P. 401とされているだけで「漢学」であることを明示しない。

(6)大学の君胸のみふたがりて、ものなどもみいれられず、くつしいたくて……

（乙女P.271）

All this while Yugiri sat hour after hour in his room, giving no heed to what was going on this busy house. P. 421

「ものなどもみいれらず」は、夕霧か雲井雁のことが胸いつぱいになつて「食べ物なども見むくことができないで」という意味であるが、英訳はこれを「このにぎやかな家で何が起こつているかなど気にも留めないで」として誤釈したようである。

b 誤読 Due to misreading

冷泉帝を Ryozen としていることにはかわりがない。他はみあたらない。

c 文脈 Due to misinterpretation of cotext.

原作は、いうまでもないことだが、主語・述語・接続詞などの省略や、またそれらと関連して連用中止法や接続助詞を多く用いることでセンテンスがいくえにもつながり、その重層的な文体のなかで主語がいくども入れかわる。また、丁寧・謙譲・尊敬などの敬語法によつて機能的、あるいは心理的に規制される主語の判定に苦しむわけであるが、こうした、英文とは対蹠的な文体のために、英訳にさいして必然的に犯された動作の主体にたいする誤解が散見する。

(1)人だまひによろしき若人、童などのせて、御おくり参らす。
（薄雲P.160）

In the next carriage followed a band of youths and little girls whom he had brought to form the child's escort on the homeward way. ……P. 366

原作は「御供の人たちが乗る副車に姿かたちの相当な若い女房や女童をのせて姫君の御送りに参らせる」ということであるが、「参らす」は明石上の姫君にたいする謙譲語である。したがって、「のせて」も「御おくり」も主語は明石上と解される。英訳はこれを源氏と誤認しているのである。

(2)「過ぎにし方、ことに思ひなやむべきこともなくて……下略」
（薄雲P.185—6）

'Years ago,' She (Lady Akikonomu) said, 'at a time when I might have been for more happily employed. ……P. 379

このセリフは源氏のもので、秋好中宮のものではない。ところが源氏の過去における「さるまじき事（恋）どもの心苦しき」事の一つに「この過ぎ給ひにし御こと」——すなわち六条御息所を挙げるとき、英訳は、The first was with Lady Rokujo, your mother としている。したがって訳者は、当然源氏の梅壺女御（秋好）にたいするセリフとして訳しているのであるが、冒頭の主語をうつかり間違えたものらしい。

(3)殿には大方のことども、中宮よりも、わらはしもづかへの料まで、えならで奉れ給へり。
（乙女P.269）

Genji determined that the dancer supplied by his household should make a brave show, and he equipped her with a body of pages and attendants such as the Empress herself might well have been proud of. P. 420

五節の舞姫の準備にあたつて、「二条院では大方の用意をし、秋好中裏（梅壺）からも童女や下仕の女房のつける装束まで立派にしたてて源氏のところ（二条院）へさしあげられた」というのが原作の大意である。しかるに英訳では Genji determined から brave show までは訳者の情況解説のつけ足しであるとしても、以下の訳文では「わらはしもづかへの料」は中宮側からとのえたことにはならない。しかも訳は原意からかなりの距離がみとめられる。すなわち、「源氏は自分の一家から給せられた五節の舞姫がきつと、素晴らしい見ものとならなければならぬと心にきめた。そこで彼は中宮自身がきつと十分誇りにすらできるような多数の小姓やお供を舞姫につけた」というふうになつて専ら源氏の所為に訳されているのである。

(4)「さいはいにうちそへて、猶あやしうめでたかりける人なりや…とぞ聞き待る」など、かつ物語聞え給ふ。（乙女P.247）

'The Lady of Akashi,' said To no Chujo presently, must, as I have said, be exceptionally gifted; but she has also had great luck.'……And he told the whole story, so far as the facts were known to him. P. 409

これは明石上の身の上の幸いについて大宮とその息内大臣（頭中将）との対話の中の一節であって、大宮のことばである。それを内大臣のことばとしている。けだし、「聞え給ふ」という謙譲語で、親子関係の教語表現が通俗的に誤解されたものであろう。つづく内大臣のセリフ「女はただ心ばせよりこそ、世に用ひらるゝものに侍りけれ」は、こんどは間違いなく内大臣のセリフだが、これを Women, he went on,…… と訳して導き出しているので、(2)の場合とは違つてやはり全セリフが内大臣のものとされている。

(5)しひてけどほくもてなし給ひ、御琴の音ばかりをも聞かせ奉らじと、今はこよなく隔てきこえ給ふを……（乙女P.251）

'…because he (To no Chujo) does not want her (Kumoi no Kari) to hear the little gentleman (Yugiri) play on zithern. P. 411

問題は原作の圏点をほどこした部分にある。「雲井雁の御琴の音を夕霧にはお聞かせ申し上げない」と解されるが、英訳では「夕霧の琴の音を雲井雁には聞かせたくない」とあつて、琴を弾く主体が転倒している。

(6)大宮もさやうの気色は御覧ずらんものを、（夕霧は）世になくかなしうし給ふ御うまごにて、まかせて見給ふならんと、人人のいひし気色を、めざましうねたしとおぼすに、御心動きて、すこしををしうあざやぎたる御心には、しづめがたし。（乙女P.252—3）

The old princess saw all that was going on; but Yugiri was her favourite grandchild, and whatever he did she accepted as perfectly justified. But she too was very much irritated by various conversations that she overheard, and henceforward watched over the situation with all the concentration of which her vigorous and somewhat acrid nature was capable. P. 412

大宮にとつては源氏の息夕霧も内大臣の女雲井雁もひとしく孫として可愛い。内大臣は雲井雁を東宮妃にして「わくらは人にまさる事もや」とチヤンスを窺つている。こうして、内大臣は源氏へのライヴァル意識からこの会話の様子を「ねたし」と思うのである。そして「少し男々しく、あざやぎたる」内大臣の心は「しづめがた」い。いうまでもない以上の内容の主語は内大臣にほかならない。英訳はこれを大宮とするのである。

(7)「これあけさせ給へ。小侍従やさぶらふ」と（夕霧は）のたまへど、音もせず。御乳母子なり。（乙女P.260）

'I am Kojiju,' he (Yugiri) said in a feigned childish voice. 'Do let me in! This Kojiju was the child of Kumoi's old wet-nurse; P. 416

夕霧が雲井雁の許に忍び込もうとする時のセリフ。「この障子をおあけ下さい。小侍従はおりませんか。誰の音もしない。小侍従は雲井雁の乳母の子である」というのがその大意。夕霧は禁じられた恋人の名を直接呼ばずに、まずお付きの小侍従を呼んだふりをしている。英訳は夕霧自身が小侍従の風を装う conterfeit のである。

b 改訳　Due to departure from original Japanese.

原意の面影をほとんどとどめないもの。

(1)などかうしも心弱きさまにと、（源氏は）人目を思しかへせど、いにしへよりの（藤壺の）御ありさまを、おほかたの世につけてもあたらくをしき人の様を、心にかなふわざならねば、かけとどめんかたなく、いふかひなく思さるること限りなし。（薄雲P.172）

He (Genji) feared that this display of emotion would arouse comment among those who were standing by; but indeed anyone who had known her as she used to be might well have been overcome with grief to see her in so useful a condition. Suddehly he looked up. No thought or prayer of his could now recall her; and in unspeakable anguish, not knowing whether she heard him or no, he began to address her:P.373

(2)（明石上は）まして（源氏を）見奉るにつけても、つらかりける御ちぎりのさすがにあさからぬを思ふに、なかなかにてなぐさめがたき（明石上の）気色なればこしらへかねたまふ。（薄雲P.192）

But when he (Genji) thought how she must wait for him day after day and how seldom her hopes could ever be fulfilled, he suddenly felt and showed an overwhelming compassion towards her. This however had only the effect of making her more than ever inconsolable. Seeking for some means of distracting her mind, he noticed……P. 382-3

(3)（女五宮）「いともいともあさましく、いづかたにつけても定めなき世を、おなじさまにてみ給へすぐす、命ながさのうらめしきことおほく侍れど……　（槿P.198）

'Oh, the changes, the changes,' she broke in; 'such terrible destruction I have seen on every side. Nothing seems safe from it, and often I feel as though I would give anything to have died before all this began. P. 385.

(4)（源氏の心）たち返りいまさらにわかわかしき御文がきなども、にげなきことと思せど、なほかく昔よりもてはなれぬ御気色ながら、くちおしくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじくおぼさるれば、さらがへりてまめやかに聞え給ふ。　（槿P.204—5）

He (Genji) realized the impropriety of the letters with which he had in old days assailed her and did not intend to return to so unrestrained a method of address. His new style had indeed met with a certain measure of success; for whereas she had formerly seldom vouchsafed any answer at all, he now received a not friendly reply. But even this reply was far from being such as to satisfy him, and he was unable to regist the temptation of trying to improve upon so meagre a success. He wrote again, this time in much less cautious terms,……P. 388

(5)かかるを見つつ、かりそめの宿をえ思ひすてず、木草のいろにも心うつすよとおぼししらる。くちずさびに、

いつのまに逢がもととむすぼほれ
雲ふる里とあれしかきねぞ　（槿P.210）

and it seemed to him (Genji) impossible to go on doing things just as though they would last……as though people would remember……'And yet, he said to himself, 'I know that even at this moment the sight of something very beautiful, were it only some common flower or tree, might in an instant make life again seem full of meaning and reality. P. 390

(6)ゆかしげなきことをしも思ひそめ給ひて「人に物おもはせ給ひつべきが心ぐるしきこと。かうもきこえじと思へど、さる心も知り給はでやと思へばなん」と（大宮は）聞え給へば……　（乙女P.259）

It is unkind of you to take advantage of us all like this,

because naturally I get the blame just as much as you. But that is not why I am talking about it. I mention the matter because you might not otherwise discover that you are in dirgrace……'P. 415

(7)宮（大宮）の御文にて、「おとど（内大臣）こそ恨みもし給はめ。君は（雲井雁）さりとも心ざしのほども知り給ふらん。わたりてみえ給へ」と聞え給へれば……　（乙女P.265）

Soon after to no Chujo left, Kumoi received a note from Princess Omiya: Your father is going to take you home with him this evening. I hope you understahd that this is entirely his doing. Nothing that happens will ever change my feelings towarbs you…Come see me at once……! P. 418

(8)「人の御宿世〳〵のいと定めがたく」とのたまふ。　（乙女P.266）

'It may all come right in the end, without any need to upset the poor little thing like that!'P. 419

(1)は藤壺の死の直前に源氏が悲嘆にくれる場面である。英訳は原作の悲しみを伝える余り、その文脈を辿りながらもきわめて劇的に改変されている。(2)の「さすがにあさからぬを思ふに、なかなかにて…」というところなどはよほど王朝散文に習熟しないと原意を判じがたい。英訳は原作を無視して源氏の明石上にたいする憐憫に作り変えているようである。(3)では、「命ながさのうらめしきことおほく侍れど」の部分の改訳が特にはなはだしい。(4)は槿にたいする源氏の気持を叙したものだがHis new style had indeed met with……あたりから以後はことに原文との距離がはなはだしい。(5)は源氏の独白だが、原作はまったく改変されている。(6)は夕霧にたいする大宮のことばであるが、「ゆかしげなきことをしも思ひそめ給ひて」はいとこ同志の結婚という事実をさすのに、それを「このようにわたしたちを出しぬく」take advantage of us all like thisとしては原作からはなれる。また、「かうもきこえじ」の訳も同じように原意を無視している。(7)は改訳にはちがいないが、「おとど恨みもし給はめ」を「あなたのお父上は今宵はあなたを邸につれてかえろうとしているのです」(Your father…this evening）としたのは、かえつて原作よりも明解である。なぜなら、内大臣は「恨みも」するから娘を連れかえろうとするからである。(8)は全き改訳であるが、原文の一般的な人生観が、ここでは雲井雁のことに託して「結局はすべてうまくいくようになるものだ」とされている。

Ⅲ 歌の訳し方 Translation of "Uta"

以前とりあつかつた部分には、b会話形態　c叙述形態に訳し分けられ絢爛たる趣きを呈したが、この三巻ではaの韻文形態が圧倒的で、b、cの形態はほとんどみあたらないのが特色である。韻文形態といつても、行を換えて詩的スタイルに配列されたものはなく、韻をふんでいるわけでもない。多くは原意をつかんで大胆に換意し、散文にシ

ナをつけた程度のものである。例えばつぎの有名な歌などがその典型的な例である。

「入日さす峰にたなびくうす雲は
　　物思ふ袖にいろやまがへる」
人きかぬところなればかひなし。　（薄雲P.174—5）

…and none being by to hear him he (Genji) recited the verse: 'Across the sunset hill there hangs a wreath of cloud that garbs the evening as with the dark folds of a mourter's dress." P. 374

歌のこうした三通りの訳し方の機能的な必然性はすでに前にふれたところであるので、ここでは贅しない。

Ⅳ欠訳　Omissions

(1)（尼君）「……又親王たち大臣の御腹といへど、なおさしむかひたる劣りの所には、人も思ひおとし、親の御もてなしも、えひとしからぬものなり。ましてこれは、やむごとなき御かたがたにかかる人いでものし給はば、こよなくけたれ給ひなん。程々につけて、親にもひとふしもてかしづかれぬる人こそ、やがて貶しめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみじきこころをつくすとも、かかる深山がくれにては、なにのはえかあらん。ただ（源氏に）まかせ聞え給ひて、もてなし給はんありさまをもきき給へ」と教ふ。　（薄雲P.155—6）

(2)「月頃なやませ給へる御ここちに、御行ひを時の間もたゆませ給はずせさせ給ふつもりの、いとどいたうくづほれさせ給へるに、この頃となりては、柑子などをだにふれさせ給はずなりにたれば頼み所なくならせ給ひたること」と、なげく人々おほかり。　（薄雲P.171—2）

(3)御わざなども過ぎて、ことどもしづまりて、みかど物心ぼそく覚したり。　（薄雲P.175）

(4)すぎおはしましにし院　（薄雲P.176）

(5)一世の源氏、又納言、大臣に成りて後に、さらに親王にもなり、位もつき給へるも、あまたの例ありけり、人がらのかしこきにことよせて、さもやゆづりきこえましなど、よろづに思しける。　（薄雲P.181—2）

(6)追風なまめかしく吹きとほし、けはひあらまほし。（槿P.200）

(7)古りがたくおなじさまなる御心ばへを、世の人にかはり、めづらくもねたくも思ひ聞え給ふ。　（槿P.205—6）

(8)とけてねぬ寝覚さびしき冬の夜に
　　むすぼほれつる夢のみじかさ　（槿P.224）

(9)うちなき給ひて、いかにしてかいたづらになり給ふまじきわざはすべからんと、しのびてさるべきどちのたまひて、大宮をのみ恨みきこえ給ふ。（乙女P.257）

(10)さ夜なかに友よびわたるかりがねに
うたこ吹きそふ萩の山風
身にしみけるかなと思ひつづけて……（乙女P.260）

(11)男君は、立とまりたる心ちも、いと人わろく胸ふたがりて、わが御方に臥し給ひ（乙女P.268）

まず(1)は、母方が高貴な家柄でなければ現世的栄達はのぞめえない例を、源氏自身だけにとどめて、右の文は親王・大臣腹の娘たちの例であるが、これが省略されたことになる。尼君が明石上の母性愛を殺して明石姫君の将来を思うあまりあえて源氏に託そうとする痛切なセリフである。中流階級出身の女性の運命を物語る重要な一節であるだけに、やはりここは全訳を期待すべきところであろう。(2)は藤壺の薨去直前にその病状を源氏に女房たちが申し上げる条である。これも次第に死の影がしのびよる源氏久恋の女性であるだけに英訳をのぞまなければならない。(3)は藤壺の四十九日の法要が終って、冷泉帝が寂寥におそわれる一節。一文は後に続く夜居の僧の密奏の心理的伏線として千鈞の重みをもちつつ、不気味に独立して存在している。ゆえにこれもぜひ英訳されるべきであった。(4)は夜居の僧のことばに出てくるもので、故桐壺院のこと。冷泉帝出生の秘事を告白するのは藤壺と源氏とこの故桐壺院をふくめてのことだというのが夜居の僧の考えであるから、これも落してはならない。(5)は真相を知らされた冷泉帝が帝位を源氏に譲ろうとして思い乱れるところである。「一世の源氏」から「あまたの例ありけり」までは欧米人には関係ないにしても、後半はぜひ訳に加えるべきであろう。(6)は源氏の香の追風である。(7)は槿の旧態依然としたよそよそしさにたいする源氏の恨みである。(8)は藤壺の恨みを夢に見てうなされた源氏が、紫上に「こはなどかくは」といわれ、消え去った藤壺の幻影を求めての独吟である。(9)は夕霧などの、「ただ人のすぢ」に想いを懸けて自分の思うようにならない雲井雁の将来を心配した父内大臣が、恨みのすべてを母の大宮になすりつけるところである。(10)は雲井雁によう逢えない夕霧の悲しみの独白である。(11)は雲井雁の去つた後の虚脱した夕霧の心中を暗示するものである。(7)から(11)までをとるか、とらぬかは所謂訳者の主観によつて決まる。しかし、原作ではそれぞれの文脈においていずれもきんみつな因果関係を保つて生きている条ばかりであると思う。今回に列挙した諸例にかんするかぎり、わたくしはこれらの欠訳を遺憾なものとして考えざるをえない。（未完）

注、早大『比較文学年誌』第一号　昭和四十年三月
本学『紀要』第十集　昭和四十一年十二月
早大　同右　第三号　昭和四十一年六月

補遺　Supplements

I a … e x

(1)君も猶かくてはえすぐさじ…思ひみだれたり。(薄雲P.152)
How much longer……justified grievance. P. 363

(2)大井につきせず……なげきそへたり。(薄雲P.162)
Meanwhile the mother at Oi……repent of her docility. P. 368

(3)うららかなる空に……ひきつれ給へり。(薄雲P.163)
The New Year was ushered in……those young visitors. P. 368

(4)月頃はつねの御なやみと……おぼしいりたり。(薄雲P.170)
Genji too was dismayed at……for her condition. P. 372

(5)又かくおはしませば……思しなげく(薄雲P.172)
When you now to die……and misery. P. 373

(6)ゆゆし(薄雲P.190)
—and surely Prince Genji……is combined. P. 381

(7)いでや御すき心の……つぶやきあへり(槿P.209)
'Come, come,……frivolity. P. 390

(8)大将さかづき……やせなり(乙女P.241)
To no Chujo……joy and pride. P. 406

(9)なほ梅壺……おどろき聞ゆ。(乙女P.244)
The claims……her outside the court. P. 407

(10)気色を……出で給ひぬ(乙女P.251—2)
It meant……on a romantic tinge. P. 411

(11)…ときこえ給ふも……いとほしけれど(乙女P.254)
He quite……between them. P. 254

(12)御乳母……なげくなり。(乙女P.267—8)
The nurse……affront upon him. P. 419-20

(13)とのたまひはこぬに……渡り給ひぬ。(乙女P.268)
But she had scarcely……out of the room. P. 420

c o n

(1)今まで忍びこめられ……のたまはす。(薄雲P.178)
I am only sorry……out of the secret. P. 375-6

(2)冬つかた……きこえ給ふ。(槿P.207—8)
Winter drew on……the western wing. P. 389

(3)さまよきほど……給ひて(槿P.214)
Genji, feeling……distress. P. 392

(4)いでや物げなし……み給ふに(乙女P.266)
'The truth is'……entered room. P. 419

I b

(1)げにいにしへは……かぎりなし。(薄雲P.153—4)
But while he was speaking……jealousy aroused P. 364

(2)みちすがら……おぼす(薄雲P.160)
All the time……towards him! P. 366

(3)わか君は……くちおしくおぼさる。(薄雲P.161)
The child had……of his birth. P. 367

(4)うへ、なにごとならん……とおぼして(薄雲P.176)
It was strange that……the Emperor's mind. P. 374

(5)僧都すすみ奏するを……めしとどめて　（薄雲P.177）
The old priest……to return. P. 375

(6)ひとかたならず……聞えさせ給ふ　（薄雲P.183—4）
And they fell to……whole life. P. 378

(7)今宵はいとまめやかに……せめきこえ給へど　（槿P.213）
He sent in……of his feelings. P. 392

(8)姫君の……心地するを　（乙女P.248—9）
It was very pretty……Budhist carvings. P. 410

(9)こなたにとて……給へり　（乙女P.249）
Here she is,……her curtains. P. 410

II a

(1)ただ世の常の……など思す　（薄雲P.166）
Indeed, had not……her through. P. 370

(2)帝御としよりは　（薄雲P.168）
The Emperor……only twelve years old. P. 371

(3)院に別れ奉らせ……おぼしめさる。　（薄雲P.169）
Merely in his……openly displayed. P. 372

(4)おとどは……おぼしなげく。　（薄雲P.171）
He was a mere……the care of him. P. 372

(5)かたはし……かたはらいたしや　（薄雲P.180）
Thus Genji……of mind. P. 377

(6)おほやけの御後見……侍らん　（薄雲P.186—7）
Soon after I came……uncongenial. P. 379-80

(7)さすがにはしたなく……心やましきや　（槿P.214）
She meanwhile……to close. P. 392

(8)みやうちいと……ひとつ心と見ゆ。　（槿P.216）
Other visitors at……concerning her. P. 393

(9)殿の御中の……あかし給ふ。　（乙女P.253）
Now as always……jealousies. P. 412

(10)はかばかしき身に……おしのごひ給ふに　（乙女P.253）
I know……between us. P. 412

(11)十四になんおはしける　（乙女P.265）
Though only eleven……P. 419

c

(1)なにか……なくけはひ哀れなり。　（薄雲P.159）
Whetther it is……such distress. P. 366

(2)女君も……聞え給へり。　（薄雲P.162—3）
Fortunately Murasaki……to bestow. P. 368

(3)宮の御前に……臥し給へり。　（乙女P.260）
Soon however all……happened! P. 416

d

(1)さることは……たへぎりける。　（薄雲P.160）
She strove……moving away. P. 366

(2)いとほしきなかにも……きこゆ　（乙女P.257）
So they were all……indeed. P. 414

以上